

県研究主題

具体的な活動や体験を通して気付きの質を高める学習活動を充実し、
生活科学習の特質を生かした学習指導と評価の工夫・改善

提案1

提案者 横浜市立丸山台小学校 菊野 一美(横浜地区)

<研究主題>

一人ひとりの児童自身の気付きの質を高め、
活動や体験を一層充実させるための授業展開の工夫・改善
～学びの連続性を大切に活動や体験と表現との相互作用の充実～

1 提案内容

これまでの学習を通して、できるようになったことを生かして取り組み、自分の成長に気付くとともに、学校生活を支えてくれている人々との深いつながりに気づき、自分たちもその一員として学校生活を豊かにしていこうとする意識を育てることをねらいとして研究を進めた。

(1) テーマについて

学校探検で始まり、学校紹介で終わるという1年間の継続した学びを大切にすることで生活を支えてくれているまわりの人々と自分の深いつながりに気づき、さらにその一員として自分たちで豊かな学校生活をつくらうとする意識を育てようと考え、テーマ設定を行い、研究を進めた。

(2) テーマに迫るための手立て

① 行動や気付きの価値付け

1年間の学びの足跡となる掲示物に目を向けられるよう環境を設定しながら、いろいろな体験、経験を通して、自分たちの成長を子どもが自覚できるよう価値づける。また「新1年生のために何かしてあげたい」という子どもの願いや思いを単元化し、子どもを中心とした学習展開を進める。

② 学び合い

入学する前の思いを振り返り、一人ひとりが心配していたことや不安だった思いを共感し、学級全体で共有する。また年間を通して交流を続けてきた年長児の様子を思い出しながら話し合いを進めることで相手意識をもつようにする。その思いから自分たちにできることを考え、話し合う時間を十分に確保する。

③ 問い返し

学校探検での学びを生かして課題解決に向かえるよう、子どもたちの気づきに対する意図的な問い返しをする。

(3) 授業実践まとめ

単元名 「もうすぐ2年生～『学校は楽しいよ』大きくせん!～」

- ・ 1年前に自分が抱いていた気持ちを思い出したり、交流を続けている年長児の気持ちを

考えながら話し合いを進めたりすることで相手の立場に立って具体的な学校案内の方法を考えることができた。

- ・ 自分たちの経験を元にした発想から活動が始まった。また子どもの気付きや発言に対する授業者の問い返しにより、意図的に葛藤する場面をつくり話し合いを焦点化することで、問題解決に向けても体験、経験を生かして取り組むことができた。
- ・ 子どもたちの思いや願いから課題を設定し、気付きや行動の価値付けを繰り返しながら学習を展開したことが子どもたちの達成感となり、自分自身の成長に対する気付きにつながった。
- ・ 学校生活を支えている人々との関わり合いを通じて取り組んだことで、自分たちも学校を豊かにできたことに気付き、これからの学校生活を送る自信につながった。

2 協議内容

(1) 個々の児童の思いを学級全体の願いとするためにどのような手立て、支援をしたか

⇒ 本単元での中心となったトイレに対する取り組み以外にも様々な案が出された。自分自身の思い出を振り返らせながら、実現したいこと、できることの話し合いを行い、子どもたちが活動を決定できるようにした。トイレの壁に描いた絵の出来ばえのみにこだわるのではないよう、活動目的をはっきりとさせて活動を繰り返すことで、問題解決へとつなげていった。

(2) 一人ひとりの気付きの質を高めるためにどのように見取ったか

⇒ 活動目的にあわせてワークシートを継続的に活用し、子どもの気付きや思いを見取った。またつぶやきを捉えて問い返しをするとともに、一人ひとりができるようになったことを見つけるよう意識して学習を進めた。

(3) 評価の観点をどのように定めたか

⇒ 問題解決を展開していく子どもの姿を想定し、自分を中心に置きながら相手のことも考えて学習を進めていくことに重点を置いた。その単元の中だけでなく、日々の授業実践、学校生活全体で子どもの様子をていねいに見取り、評価につなげることが大切だと考えている。

※授業者と指導主事より返答

3 まとめ

- 子どもたちが本気になり没頭できる課題を設定することで、個と個がつながり、それぞれが全体を意識した学習として展開することができる。
- 小さなハードルを一つひとつ越えることで子どもたちが達成感を味わえるようにする。その積み重ねにより、子どもたちの自己肯定感が育まれる。
- 子どもたちが試行錯誤できる課題を提示し、子どもたちの「やりたい！やっていいの？」という思いを膨らませ、その思いが実現できるようにする。
- 生活科における評価は、子ども一人ひとりのエピソードの積み重ねである。夢中になって活動したり考えたりしている子どもの姿を、ていねいに見取ることが大切である。
- 子どもにとって楽しく豊かな体験を通して、子どもたちの未来につながる力を育みたい。

<研究主題>

生活科における学びのみとりとその手立て
～一人ひとりの気づきの質を高め、自分に自信をもつことのできる授業づくり～

1 提案内容

子どもが意欲的になることは、学びや気付きにつながり、自分の自信へとつながっていくと考える。子どもが意欲を持って取り組めるように学習の導入を大切に、学習活動の中で、様々な手立てを通し、充実感や達成感をもたせ、自信へとつなげていくように取り組んだ。

単元の中では、子どもの気づきの質を高めるために、一人ひとりの気づきを交流させる場を設定し、子どもの学びや変容を見取るための手立てを工夫した。

(1) テーマについて

生活科の目標の達成のためには、子ども一人ひとりの気づきの質を高め、子どもが自分に自信をもつことのできる授業を展開していくことが大切であると考え、テーマを設定した。

(2) テーマに迫るための手立て

① 一人ひとりが思いを持って学習に臨める導入の工夫

子ども一人ひとりが「知りたい」「調べたい」と思えるような導入をすることによって、子どもの意欲を高める。

② 繰り返しインタビューしたり調べたりする活動

繰り返し家族と話をする場面を設定して、子どもの「もっと知りたい」という思いを膨らませ、気づきの質を高める。

③ 表現方法を選択してまとめる

子ども自身が一番伝えられる方法を自分で選び、まとめを行うことで、子どもの思いを十分に表現できるようにする。

④ 伝え合いや交流の場を設定

友だちとの伝え合いや交流を通して、新たな自分への気づきをもたせる。また、友だちの成長を見つけ伝えることで、お互いに認め合い自信につなげる。

(3) 授業実践 単元名「あしたへダッシュ」(16時間扱い)

① 成果

- 一人ひとりがこれまでの自分について興味を持って調べることができ、調べたことを発表したり、まとめたりすることを通して、自分の成長や良いところ、友だちの成長に気付くことができた。
- 自分の成長を振り返ったことで、自分に自信をもつことができ、自分になりたい3年生の姿をイメージし、伝えることができた。
- 評価をするときに、学年でワークシートや作品を見合ったことで、評価規準が具体化され、客観的な評価に近づけていくことができた。

② 課題

- 評価については、子どもたちの記述したもの、活動場面での姿、つぶやきなど様々な評価場面を考え、その場面に合った評価規準を学年、あるいはブロックで話し合って決めておくことが必要であった。実際の子どもの姿をもとに評価規準を作り、見取りを評価につなげていくことが今後の大きな課題である。
- たくさんの人に支えられていることについての記述は少なかった。他者と自分との関わりについて目を向けさせるには、どのような手立てが必要だったのか考えたい。

2 協議内容

- ・ 「成長を支えてくれた身近な人」とは、授業者としてはどんな人だと考えたか。
- ⇒ 幼稚園、友だち、家族が身近な人ではないだろうか。この単元を第一段階とし、4年の総合的な学習の時間で設定している単元「二分の一成人式」につなげていけたらと思う。
- ・ 子どもは本や大きなポスターなど、自分なりの様々な方法で表現できた。その表現の違いをどのように評価につなげたのか。
- ⇒ 作品の出来ばえではなく、単元を通してどんなことを学んだのか、どのように感じてどう考えたか等の、子ども自身の考えや思いを表現していることを評価したいと考えた。
- ・ 「思考・表現」の評価が難しいのではないかと。子どもたちのまとめたものの中で、具体的にどのようなことが書かれていることに注目したか。
- ⇒ 1時間で子どもの変容を見取るだけでなく、前後の子どもの表現や状況をていねいに見取る必要がある。「思考・表現」の評価は今後も課題として研究したい。

3 まとめ

生活科は直接体験が大切である。その体験の中から「このようにしていみたい」という子どもの知的好奇心・探究心につなげたい。それが子どものひらめきの引き出しを増やしていくことにつながる。引き出しを増やす中で、子どもが自分の変容に気付くよう働きかけ、ていねいに見取っていくことが大切である。評価するには客観に近づくこと、繰り返し見ること、何度も見ることが大切である。

様々な教科との関連だけでなく、繰り返し人やもの、自然や社会と関わること等、様々な体験からの気づきを子どもが積み重ねられるように活動や環境を設定したい。

4 グループ協議

協議の柱「子どもの姿を適切に見取り、気づきの質を高める指導の工夫」

(1) グループ協議の報告

- ・ 評価規準を、最初に学年で共通理解しておくことが大切。
- ・ C評価の子どもへ、どのような指導をしてBの姿にしていくかが大切ではないだろうか。そのために、A、B、Cの具体的なイメージをもつ必要がある。
- ・ 活動ありきにならないように、どんな力をつけたいかを明確にしておく。
- ・ 指導者が本時目標を明確にもっていることが大切である。
- ・ 学習のゴールを明確にすることで、指導者も子どもも見通しを持って取り組める。
- ・ 気持ちや行動を捉えて評価につなげていくためには、評価計画が必要である。
- ・ 授業者はできるだけ「次はこれをやるよ。」と言わずに、子どもの思考が連続していくような活動や環境を設定することが大切ではないか。
- ・ ワークシートや作品の出来ばえではなく、その子なりの素直な表現を評価する。エピソードで評価することが大切ではないか。

(2) まとめ

- ・ 気づきの質とは、「一人ひとり」の認識であり、子どもの主体的にな活動によって生まれるもので「わかった!」といった知的な側面と「うれしい」といった情意的な側面があり、「またやってみたい」「もっとやってみたい」と次の活動を誘発するものである。表現することによって体験を確かなものにしていく。
- ・ 言語活動を行ううえで「具体的な体験を通して」という生活科の特質を忘れてはいけない。充実した体験が充実した言語活動につながる。活動が子どもにとって楽しいものになっているかが重要。活動に子どもの必然性があるかを常に意識する必要がある。